

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
JAPAN
Takumi

山東庵京山作

息子むそ
家賦かふ 身持扇みうちあみぎ

歌川國丸重画

卷之

此草子を文化十四年夏四月京之上京の
時とき小の爲ためんで三月三庚さんぎ小ちつけより作なすて今年
樟カシより上うへきとまゝて再なまされを閑ひまる小首くび、我作わたくしの
ぞく明どう心学じんがく小似にて毛けハ育いく婉ゆび小愕おどろち戯わざ
言ことかれば角かくああんまた笛フル小似にり一曲いっくをき
んふふもあれど一通いつつうの縁縁を経たどり夏なつの櫻さくら
がくくとちがひて丸でまる要いのバたたうがくくああしてね
乃恨うらやか樟カシ上うへ乃耻ぢぢを走はく年と秋あき硯すの行ゆ秋あき秋あきの

文政ニ年冬十月山東庵京ア

遠 T3
2378
34

圖書室印







絹とひのきともあれ本の板元丸甚
吉方てかゆくおみややたる物をの
仕合ひのゆとまことにまがたひき
きみればほのぞき秋月どりうて
うとひとけりづとあてこくん片
あら今もうそとまことむらるる
タれ言のうかとわうにかねをと
まよとむさすやうせと
むにね元おうかめき

うりぬ

万葉集山名と有事
金之多のがふるはる量
いもじ司られば
川とたびハ磐川の
あれにこそさき
わが見ねう
もあがるやと
立の草も
うせもの

わ生す
知月の子者
月の下からむ
用ゆゑてすま川と
えりすてん西村乃

△さへばまふわつモの
田舎ありあす町なり
まくとまけそむき
りふせしといど
高木もりをひとそ
脚とせうちでうぶても
さくにあひだまきよし
かくとくもれをぶ
ゆどりまぐさきでも
こすだむあくほくを
さむひたをよほく
ねうけ共さるる
あすけりまきにま
すだむくをのせ
尺一とひきれを
先自あやそのせ
道とめ見えふ
きのをかのそ
左れのまき
こねまき

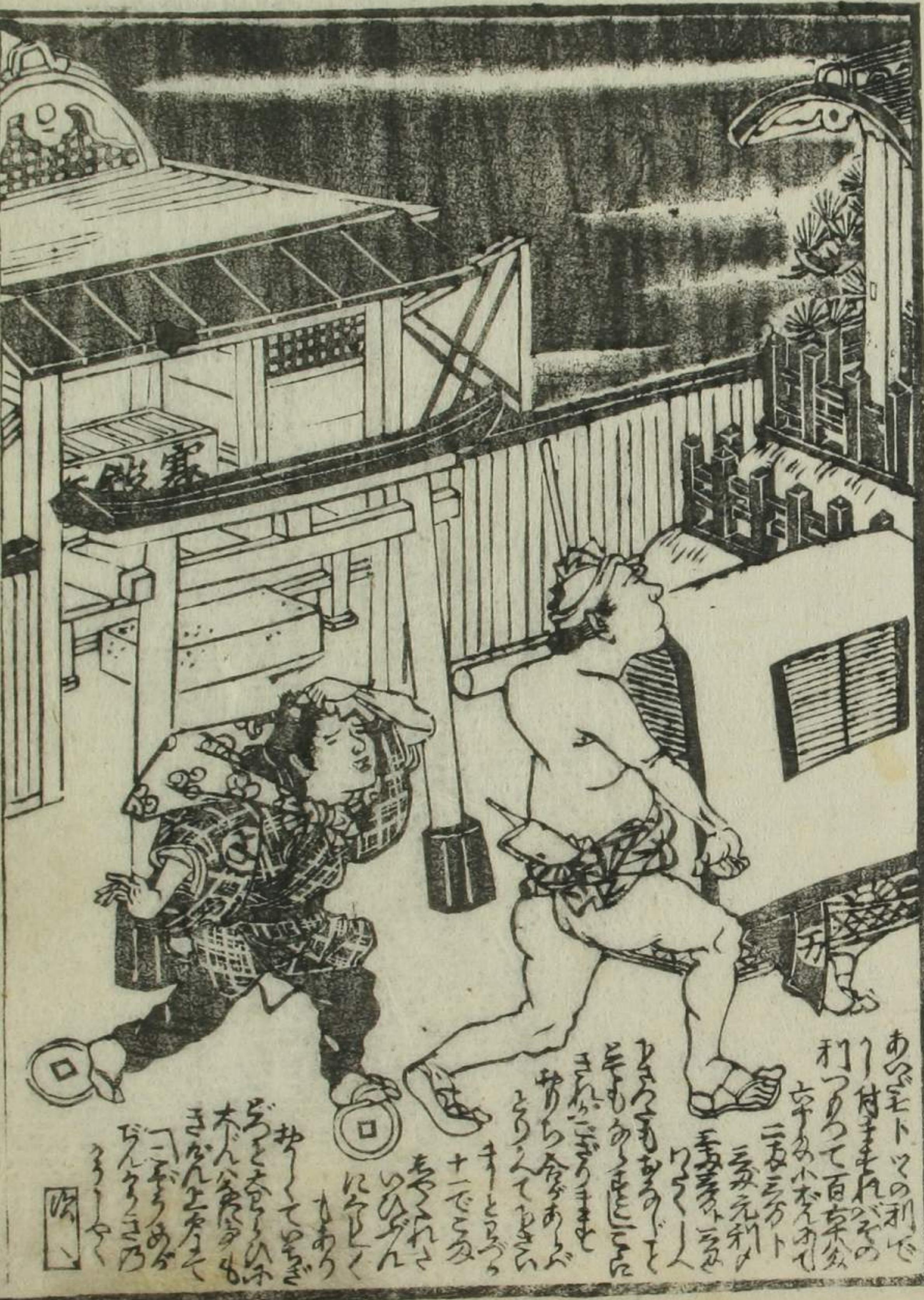
まのとくと
きのとくと
つぶのとくと
ふくらむと
ありぬ





とてのゆか二
そろつてうえふ
わくとふすづ
みげものあがべ
おきてわる日万りん
つの門のたれう
大ゆきうめどを
きいのくちと
うりあをまく
せねをすまと
アヌをまも
まらう
あめどあこりの
あきびとくさの
けんそくも
よしとまほ二ち
をまといつまうを
のひうをまゐぬを
のじのたまとせ
りはくまに分
よくともくまきと
まくの女房ク







三乃まき



さくまちかくま家
宝内二十ふんかれたのせん
二丁八千九ののとやがくる
そしきみのまうかだくと
あらはやめのまうをうきてまうく
たとくきてかどまきむら
あらうりに山野にて
のせざんで二日三夜そ
くらまんなりも三百
うてのくさんでまえをふ
よのまとうかくうと
とくどととくあきり
ゆくけさくあてあくは
くあらひるとそあわみば
くわんうりんのとさまれば
をあうともかて富の
そんでもうとさうと
りひにらうるしてうそん
をえて三日やーて三日あきの
めくうきてゆかのをまぞとく
せなみことをきくわあく
一原もとくの川と小をんで立た
くわんううう十一でかるくうんに
うまつまくもゆくまゑハスナキ











山東庵京山作



さうがほくさまわりもひきと
名をうにくまやへまうもせん
ゆるとさくべいりんせんば
司れちがまみ全のをとと
にせととりぬぞうの
四のさんハちとまえスまで
夕日も光一のこゑうり
本作であきけあたと
アモガハ三月ハからすをあれど
やめらもあまもてこれで
りくぐらかと一門わらすり
そうちのくよくをとて
もとから一人そくをまうと
えうてかひゆくぬめなう
せれとんそくせし
れううりの七十貫
やぐねりのふうり
され食あるのをえ
あたとせざれば
かのとくとて
ひざあづひとあくふ
くらまむねとくら
門用



のくわ
のくわ
のくわ
のくわ
のくわ

身持扇
京山國丸作



辰乃春丸基夜

身持扇後編

京山作園丸画
文政庚辰之春

書梓園壽堂梓



六十人上の男
女もあなれ
三公の主そ
そうも身不
さるすあり
女のえふひく
とあれを
ヨリヨリおきぬ
のどん
やさ



かくゆふはたとよきでかる
うきあらりかへるるのま
せれわゆゑきに一すゆけ
おうふみをはさんだまつて
朱に色くわねあらぐろの
石敷金合ひの花不たがい
とむことわやのじらひとす
ざるおけましあるくよだら
体覚とからぬる素そぞれ
もの小神に難下をまか
りのまとえきこへきん
やうじくすくが顔を浮か
みゆいが大花のみを
やのぶらであひの内ハ一件
ズモモもあらふそぞれ
こかをかみのあらふももまろえ
のにらは二重目の見さうる
それおのづからうのゆーの
あさ上下ハアソリ可ばとよれ
とまきてねけび、一由てハひに
まくべうじ日あさとよとし
ハひごうのええどう
きうのめにあしとひりと
ふくとあもんねくよまうを
もうて久々かゆへあらうひ
からひとれがりとあるひ

へがれ不どんは
正どんであらう

△三千食よりハ万の
五食もござりまじ
トトおれでりと
ねけりとおきま

△そつまわ
タハ三あ
タハ三あ

△ソラヤ万ハナれ
タハ三あ
タハ三あ

△タハ三あ
タハ三あ

△タハ三あ
タハ三あ

△タハ三あ
タハ三あ

あひてかゆるゆ
うのうちドヤ「さくを
うれぐで久ゆりとも
まみからん日のむけの
たれへ七日もと
休のあひとくはくは
まくとおのみく
セアニワあひせてもおな
うておひきしするもぐくゑ
とめよにまよだをま
ほだの内とあひゆゑは
されをまよあくさくとハ
わんりんふわくまくばまの
えんもととあるあは
さてこそののこしハ
ちきん体あれと
て底を手を含み
あられをせびもと
ゆてハラカつまと
ハギうどりとあがめう
さまくねくぬくぬくを
あゆきのなよんがすと
やくすのなよんがすと
やくすのなよんがすと
やくすのなよんがすと
をんそうせんハヨウりりと
△



むとこか

「初雪が、あづまて来も
あまゆうとまわる」

まのへやでひうねと
ひうてどりましりとも
おのをじもだのぶささぐ
まうくとひちあくの
あとでよきとトらく
ありとどりも其の
をうちらまことん次も

うめぎふ
うめぎふ
うめぎふ
うめぎふ
うめぎふ





まことにされを

つづき

あまくひもきて、うだきしらんよ
せうてひびくとんびよだまざる
けんをあまもなまよ
國うつものよト、くとくと
をやせれが、むねきふれ
て六男がたはとくとくと
梨、ぐわやかどきのん
ワリとあきそまをせ
もぐくとくとくとくと
がくておとくのうハ
出井方うとつとくと
あくくのうある、
おぬじともそれかくと
あるまのとおりの
あまくちまをあ
あくうこれとみせんと
そくやうのともりげくと
まをあませとを
をくわくわとまざーとあわへと
まくはくとあてを
まくはくとあてを

まことにされを

五のまき



まろすとトゞべ不ヤモホラなとあくらよ
うんであらひけよあととつておのぐれ
せぬかきふらうじやえんでもうか
まうせぬとりまうりうと
あがねばよる
おむり事う
うんでもうの
おへさめどり
のわせふり食
さト子んこ下やまうを登
と大せきむとらあを
せぬかきふらうじやえんでもうか
まうせぬとりまうりうと
あがねばよる
おむり事う

西人



むか

サヨリがおむろののを自らうまと
ちる身のうしらをもおんびうのあう
さうけをもたれりてあらしが
手もそそぎたまきをまのの
ぬけをもるる

○こえあまうるもとまるとわようとアレと
あひがまみみが二ふでむとあまと二びと
あくまをやうすまあく人ドヤ
ひがのせうれ
人あきぐでる
おおゆかよ
とこづき
おおゆかよ
とこづき

え年も
のやよ
まうせ
せのやよ
まうせ

まうせ

四

おまうすをまきにちあがんとおとそくのゆふ
えさめのとこうあがむ者人をもすりとみだり
えぢといひせのむろえり ばこれにもうておどんへ
こまのすばらくわなゆのぐまうんまへもひき
そまうんとまおあやからうどみへもひき
村やさてもうけざるでうちもひきうが
まがくさんとまおあやからうどみへもひき
そまうんとまおあやからうどみへもひき
あくえお西くらう村やさなんがぞくも
あくえお西くらう村やさなんがぞくも
そとなだれそあちまテうそうまで
年正三月八日寅月ハひまも入で

モコロだまか
そとまきま





おはうきごひでまだじう
もりとぞふされとりへだらんかわす
正ドキモ代てつま含ケでまきぬ
わまきとめうそえせんざれ
もりとあのハセトグラムと
いなと人ふうそと一見にづ
人うそづうそくけりと
そとあれとややのゆび
そむきぬのとをくろくの
ねかせかこちりまると
まうるくばがるもと
まうらそうそのけをと
まうらそつまの大せんせん
あだでへと伝んだ
それふりてもうそ
そりふりがありそ
それとそそとそとへ
まうらこりーす
そんもそとくおむ
うそのちよちとて
ゆももまそそくそと
そつまのかんじ
みとくかんじ
むきえまきふとゆて
女でのたまそけき
さくくーん
本イテの六二



いぬをこゆる
いもろくのけざかめ
みうれむ大ね
ア一包百疋ま
アニ朱ナフミ
アヌサレ江戸
ウハヅマ川口
川を賣候ひ方

西が
ねうね
いまの
みきゆの
良ゆそ
空

おはうきごひでまだじう
あひくとむりん
つにじふらの
外るとそ詠る内で
えくそとひき
まきとまくすまを
のくらう月を空き
うめのくこと
くうくう
本イテの六二

えせ太くみて
おのまへふ
おりひぐ
うそとく見
うそとく見
くうとじる
かふるを
人ふりて
舞と一



文政三年辰春新版本絵双紙目録

息子家賤身持扇全五冊	山東京山作
喜多の鏡本と有志節全六冊	歌川國九画



